

都市河川の整備におけるユニバーサルデザイン

●業務の背景

高齢者、身体障害者を含む全ての人々が自立した日常生活、社会生活を営むことができる環境を整備することは、我が国における急速な高齢化の進展、身体障害者の社会参加の確保の必要性などを踏まえると、喫緊の課題

であり、国は平成12年の交通バリアフリー法の制定、平成14年のハートビル法の改正、そしてバリアフリー化促進のための各種事業制度を充実させるなどして、積極的に取り組んでいるところです。

●都市河川の整備におけるユニバーサルデザインの概要

都市河川の整備におけるユニバーサルデザインを考える時、「地域の人々の誰もが魅力を感じることでできる川づくり」を発想の出発点とすることが重要であると考えます。

すなわち、バリアを解消して誰もが利用できるよう配慮すれば魅力的な空間になるかと言うと、必ずしもそうとは限りません。「利用しようと思えば利用できる」こ

と「積極的に利用したくなる」ことの間には大きな差があると言えます。

スロープの勾配や手すりの高さといったディテールにこだわって、川ならではの魅力を損なうよりは、危ないですよと声をかける人、車椅子を押してくれる人など、そこへ行けば、いつでも川の楽しさを慕って集まる多くの人がいるような川づくりを目指します。

●業務内容

当社実績の「阿久和川まほろばの川整備計画」を事例に業務内容を示します。

○川づくりの基本方針

1. 集いの場を創出する

昔からその地域に暮らす人から最近移り住んだ人で、また子供から老人に至るまで、様々な層の人々がそれぞれの楽しみをもって集い、交流する場を創出します。

さらに、地域イベントの開催地として活用し、コミュニティの核として感じられるような場を目指します。

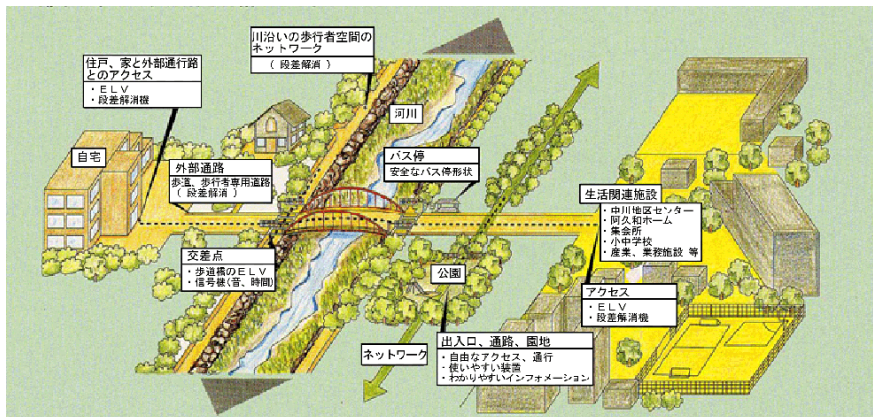
2. 川本来の魅力を活かす

川は子どもたちの冒険の場であり、川の流れや水辺の自然は若者や老人の心に安らぎを与えてくれます。しかし、こうした川の魅力は転落や増水といった危険性と裏腹の存在であり、そもそも自然の川にユニバーサルデザインを持ち込むべきかのかという疑問もあります。このバランスを十分に考慮しながら、普通の都市公園では得がたい川本来の魅力を損なうことの内容な整備を目指します。



集落、公共施設、道路を含む全体的な移動ネットワークへの配慮をします。

(事例：「阿久和川まほろばの川整備計画」)



○空間デザインのポイント

1. 利用者を選ばない水辺のデッキ

川の流れが織りなす風情や生き物の息吹が身近に感じられるよう、水辺に木製デッキを配置します。誰もが安心して近づけるよう、滑り止め、デッキエッジの車止め、水辺との安全な落差などに工夫を加えます。

2. 左右岸のスムーズな連続

川の兩岸にある広場の面積が手狭な場合、地域イベントへの利用は困難です。そこで、出来るだけ面積の広い人道橋を設け、橋面自体が広場の一部として活用できるような工夫が考えられます。また、橋が広場の中心として意識されるようなデザインとすることで、左右岸が全体として1つに感じられるよう配慮します。



3. 違和感のないスロープ

一般に、高低差がかさむ河川護岸のスロープはどうしても大規模なものになってしまい、景観的にも違和感を生じやすい要素となります。

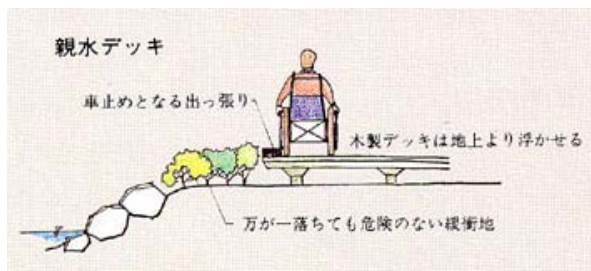
そこで、天端周辺スペースなどをあえて犠牲にして、法面を緩勾配化するなどの工夫を加えます。そして、緑の斜面をゆったりと降りるようなイメージのスロープを設けます。また法面自体を、ころがったり腰掛けたりできる快適な広場として利用できるように配慮します。

4. 快適な滞留空間

滞留空間の快適さは、心地よい日陰や座りやすいベンチだけではなく、そこから何が眺められるかによって決まってきます。水辺を見下ろすシェルターやちょっと腰掛けられる景石の配置など、広場を行き交う人や水辺で遊ぶ子どもたちの姿そのものが風景要素になるような工夫をします。

5. 自然豊かな川の流れの再生

子どもから老人にいたるまで、すべての人々にとって“川の自然”は重要な要素となります。低水路に滞筋の掘削を行って、適度な流速のある流れを確保するとともに、魚の隠れ場や水生植物の育成が可能な水際の再生を目指します。



水辺のデッキの形状



業務実績

平成6年度 阿久和川まほろばの川整備詳細計画委託（横浜市下水道局）等